

第4回例会は諸事情で10月開催が延期され、この日、一名の新参加を得て、計八名で読み残していた第三巻の下赤坂城合戦から輪読に入りました。第四巻は笠置落城後の敗者たちの物語です。斬首や遠流など、首謀者たちに下った幕府の処分は厳しいものでした。院庄で後醍醐天皇を励ます詩を献じた児島高德が実在かどうかの学説にも話題が及びました。読み慣れて来て今回の積み残しはありません。

◇この日輪読した第四巻の箇所は、次の通りです。

(一) 宮々流し奉る事

北畠具行の最期 (p190～193)

幕府は、倒幕蜂起の首謀者の一人として死罪に定めていた北畠具行の護送役、佐々木道誉に、居館のある近江・柏原で処刑せよと命じた。具行は、道誉の情けある接遇に感謝して、辞世の頌をしたため、端然と刑に服した。柏原の山林中にある具行の墓は見事な宝篋印塔で、道誉在世中の北朝年号が刻まれている。道誉は鎌倉御家人中のひそかな倒幕派シンパだったかもしれない。

※「ゆかし」の意味 具行が辞世の頌にそえた和歌は「消えかかる露の命の果ては見つ さて吾が妻の末ぞゆかしき」だった。吾が妻には「あずまの幕府」が掛けられており、下の句の意味は「わが妻と幕府の行く末が知りたい」となる。芭蕉の「山路来て何やらゆかしすみれ草」の場合は「慕わしい」「心ひかれる」などの意味だから、時代による意味の変遷が知られ、興味深い。

殿法印良忠の逮捕、訊問 (p193～195)

六波羅は良忠を逮捕して「後醍醐天皇を奪い返そうと絵図まで持ち回ったのは言語道断。謀反のすべてを白状せよ」と迫った。良忠は「臣下が叡慮を察して行動するのは当然」と答え、共謀者の事は一切、述べなかった。※良忠という人物 関白・氏長者藤原師忠の猶子だったので「殿法印良忠」と呼ばれた。北畠具行とともに早くから倒幕工作に従事、六波羅攻めでは、赤松円心軍と連携して最前線で戦った。大塔宮の腹心でもあったが、剛毅な性格で多くのあぶれ者を抱えていたので、建武政権下の足利尊氏に生まれ、大塔宮失脚の遠因ともなった。

(三) 先帝遷幸の事、並びに俊明極参内の事

天皇の隠岐配流 (p193～195、195～198)

幕府は後醍醐天皇に、隠岐配流に先立ち出家を求めたが、天皇は拒否した。正中の変後の元徳元年(1329)、

後醍醐天皇を訪ねた中国僧・明極楚俊が「二度帝位を踐ませ給ふべき御相あり」と語ったことを思い出したからだろうか。一行は、三月八日、京都を發ち、同十三日、渡海地点の出雲・美保関に着いた。

※異国僧の参内と幕府 後醍醐天皇の明極楚俊謁見は「金沢文庫古文書」所収の金沢貞顕書状が立証する。この書状は当時、六波羅南方探題だった息子の貞将にあてたもので、明極の参内を把握、通報しなかったことを叱責し、「関東の御命をも蒙候はで(幕府の許可なく)、僧を進候事、然るべからず」と釘をさしている。

(四) 和田備後三郎(児島高德) 落書の事

院庄の桜樹に十字の詩 (p202～204)

児島高德は、後醍醐天皇を奪い返そうと播磨・備前境の船坂峠で待ち伏せたが、天皇は北の杉坂峠から美作に入った事が分かった。院庄で追いつき、宿舎の庭に忍び込んで桜の幹に「天莫空勾踐、時非無范蠡」と刻んだ。天皇はひとりその意味を解して、微笑んだ。

※児島高德は実在か 太平記は、院庄の詩のほか、計6か所にもわたって高德の事績を伝えている。にも拘らず他の古文書、古文獻に全く現れないので、学界では存在が疑問視されてきた。しかし、太平記で高德と行動を共にしている人物を備前国邑久郡内の地頭と推定できることが東大寺文書で分かり、現在では高德の個々の事績は別としても、実在を認める傾向となっている。

(五) 呉越鬪ひの事

隠岐に黒木の御所 (p230～231)

天皇は、都を出て19日目の三月二十六日、隠岐に到着、府島(こうのしま)の黒木の御所に入った。所在地には、島前・西の島と島後・西郷町の二説がある。

第6巻輪読予定ページ (来年2月18日)

- 1) 275 去年9月に～278 召されける。
- 2) 279 ここに楠兵衛正成は～
281 騒ぐ事きはめなし。
- 3) 281 かゝりければ～
283 追うたりける。
- 4) 283 楠は思ふ程～285 居たりけれ。
- 5) 293 同じき8月～296 箴文なり。
- 6) 296 その比播磨国～298 上せらる。
- 7) 298 先ず一族～301 搦手に向かふ。
- 8) 312 ここに播磨国の～
315 止めてけり。
- 9) 315 かくて翌日～
317 者はなかりけり。